

渡良瀬川源流の森再生プロジェクト

特定非営利活動法人 足尾に緑を育てる会 会長 神山英昭

足尾町—源流と銅山—

足尾町は、利根川の一大支流渡良瀬川の源流にあり、銅山と共に歩んできた町である。

足尾銅山は日本一の銅山と言われ、国の経済を支える一方、銅の精錬過程で排出される亜硫酸ガスにより木を枯らし、周辺の山々は荒廃裸地化してしまった。雨が降ると硫酸銅溶液が渡良瀬川に流出し、公害の原点ともいわれる足尾鉍毒事件を引き起こした。

かつては、渡良瀬川流域は実に豊かだった。源流の山から栄養分を含んだ腐葉土が流れ出し、肥料がなくても作物が良く育った。またそこには、魚やその他の生物、多種多様な植物が生息し、共に生きる人々の暮らしがあった。しかし、上流の山が汚染され、そこから流れ出す水も汚れ、緑と水の循環は破壊されてしまった。



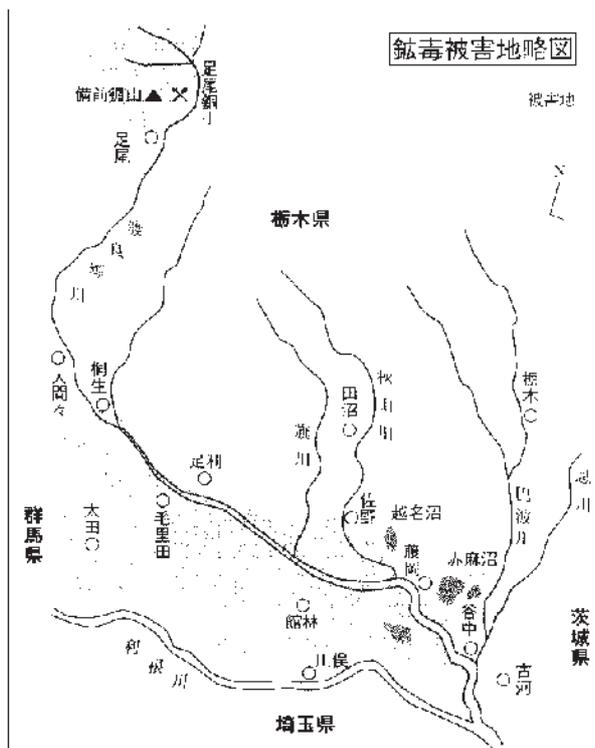
写真2 荒廃した、渡良瀬川源流の松木地区の山々

その後、国や県などの行政機関による治山治水工事や緑化事業が長年に亘って進められてきた。上流の足尾には大量の土砂を止める日本一大きな足尾砂防堰堤が作られ、下流域の渡良瀬湿地帯は鉍毒沈殿と利根川増水の緩和を目的に遊水地となった。現在、足尾の荒廃地の復旧は100年を費やし半分ほどに緑がよみがえってきたといわれている。

足尾の山を緑に、渡良瀬川に清流を

平成5年に足尾町に銅山の歴史や環境問題の資料館を建設することを目的とした、わたらせ川協会は、「大畑沢緑の砂防ゾーン」に10本の桜を植えたが枯れてしまった。これをきっかけに、わたらせ川協会の呼び掛けで、上流下流で活動する団体、渡良瀬川研究会・田中正造大学・渡良瀬川にサケを放す会・足尾ネイチャーライフの5団体が事務局となり、「足尾に緑を育てる会」が結成された。平成8年5月に任意団体として発足し、平成14年5月に特定非営利活動法人として新たにスタートした。

当会の目的は、水循環系を中心とした環境問題に取り組み、環境の健全化ならびに地域社会の伸展に貢献すること。活動内容の概要は、銅山の煙害による荒廃地の緑化活動。活動の拠点は、昭和63年建設省により砂防を目的に設置された「大畑沢緑の砂防ゾーン」であり、現在の国土交通省と円



* 『技術の社会史』 赤田丁氏作成図より。

図1 鉍毒被害地略図

滑な連携のもとに活動している。荒廃地にそのまま木を植えても、土がないため枯れてしまう。山肌に土を作る山腹基礎工事などの公共事業の後に、当会で植樹や植樹後の管理などを行っている。



写真3 山腹基礎工事が施工された植樹地めざして、階段を昇る活動参加者

源流域の山に木を植え、いつの日かの緑滴る山と、清らかな渡良瀬川の流れ、それが私たちの願いだ。

10回目の春の植樹デー

毎年4月に「春の植樹デー」を開催している。平成17年には第10回目を迎え、1,100名が参加し4,500本の苗木を植えた。これまで10年間で、の



写真4 98年4月第3回春の植樹デー
下段の縞に見える部分が植樹地、上段は荒廃し岩がむき出しになっている

べ5,710名で26,200本の苗木を植えたことになる。3,500ヘクタールもの面積が荒廃裸地化してしまったといわれており、そのうち約2.5ヘクタールにおいて実施した。

以前の緑化事業では、肥料木、また酸性土壌にも強い木といった特定の木が植えられてきたが、開催地の「大畑沢緑の砂防ゾーン」においては、木柵や土留工により山腹を階段状に整備し、その中に良質な黒土を入れる山腹基礎工事を施工した後に植えることができるため、動物との共存や植物の多様化等も考慮し、ミズナラ・ブナ・アキグミ・コナラ・サルスベリ・クヌギ・ケヤキ・ツツジと様々な木を植えている。苗木の提供者や苗木持参の参加者も増え、より多種多様な木が植えられるようになった。

9割以上の苗木が無事育ち、初年度に植えた苗木は3メートル以上にもなっている。また、ハチやトンボなどの昆虫も見られるようになり、鳥の鳴き声も聞こえてくるようになった。これらは、確実に活動の成果であり、自然の回復の兆しといえる。

荒廃地を望みながらの緑化活動は、破壊された自然の悲惨さや、よみがえらせることの困難さを実感させ、参加する人々の環境問題への関心を高めている。参加者は、「私たちの植えた木は大きくなっているだろうか」と、もう一度現地を訪れ、また木を植えていく。参加者の心の中でも育っていく木がある。ひとりひとりの手で植えていくことが大切だと考えている。

小学生の体験植樹

平成9年から、小中学校や団体を中心に体験植樹を実施している。実際に木を植えることを通して、環境問題を肌で学ぶことを主眼としている。当初は、当会と国土交通省とで別個に対応していたが、NPO法人となったのを機に、国土交通省から委託

渡良瀬川源流の森再生プロジェクト

特定非営利活動法人 足尾に緑を育てる会 会長 神山英昭

された体験植樹業務として、当会の大きな仕事となった。「公害の原点」ともいわれる足尾での体験植樹は、環境学習の場として最適であり、当初年間10団体程度だったが、平成15年度は90団体、平成16年度は100団体、平成17年度は114団体と年々増加している。

当会では、苗木や土・道具の準備、足尾の歴史や砂防事業の説明、植え方の説明、実地指導などを担当している。説明にはパネルや紙芝居を取り入れ、小学生にもわかりやすく伝えている。



写真5 体験植樹に訪れた小学生



写真6 僕たちの植えた木、大きく育て！

参加した児童生徒からの感想文には、「緑の山かと思っていたけど、近くでよく見ると草ばかりで

木が一本もなくて驚いた」「石ばかりで穴を掘るのが大変」といった発見がみられる。「私たちにできることはないか？」と、足尾の緑化以外にも、水や電気、紙、ゴミなど、身近な環境問題を考えるきっかけにもなっている。

市民ボランティアの植樹活動に、小中学生の体験植樹という環境学習が結合し、これらが官民協働の自然再生事業として展開され、広く社会的共鳴を呼んでいる。官民協働に関しても、国土交通白書（平成15年版）や、栃木県発行「とちぎの協働事例集」で紹介され、官民協働活動の好事例として評価を受けている。

年間行事

「春の植樹デー」「体験植樹」の他にも、年間行事として、様々な活動をしている。夏には「草刈デー」、秋には「観察デー」を開催し、下草刈や鹿除ネットの補修、植樹地の観察などを実施、植樹後の管理もしている。

また、平成12年から毎年8月に「足尾グリーンフォーラム」を開催。環境に関する講演会とシンポジウムを行い、「松木の山と野生動物」「官民協働の緑化事業」「環境の町づくり」など、様々な課題を論議するとともに、参加者相互の交流を深めて



写真7 足尾グリーンフォーラム、グリーンシンポジウム

いる。ほかにもフォーラム会場では、山腹工の見学、荒廃地を歩くフィールドワーク、河川での魚のつかみ取り大会など、環境のことを楽しく学習できるイベントを催している。



写真8 河川での魚のつかみ取り大会

平成17年10月には、前身団体である、わたらせ川協会の意志を受け継ぎ、「足尾環境資料室」を開設した。銅山や足尾の歴史、環境問題の本など約2,000点の資料を収集し、公開している。

今後の活動にむけて

足尾の山に緑が蘇り、豊かな森が形成されるならば、降る水を蓄え、自然のダムとなり、自然災害を防ぎ、肥沃な土壌を運ぶ。森から滴る澄んだ水が、下流の人々の飲み水など生活用水や作物を育成する農業用水などになり、人々の恩恵に寄与する。足尾の山に木を植える森づくり運動は、地球にとっても、植物や動物、そして人間にとっても有意義な活動である。多くの皆さんが足尾に目を向け、緑化活動に関心を持たれるとともに、気軽に参加されることを期待している。足尾の山の緑化運動を息長く継続させるため、関係各位のご協力とご支援を得ながら、着実に活動を進めていきたいと考えている。

●活動が持続するよう体制づくりに努める

足尾の山を緑の森に再生させるには、あと数100年もかかるといわれ、まだまだ長い時間が必要である。活動を超長期的に続けていくために、会員やスタッフなどの人的資源の充実に留意する。また、活動への参加をとおし、定年退職者の生きがいの場や、都会から移住する人々を迎える仕組みなどを構築していきたい。

●緑化活動エリアの確保、再生事業推進協議会の設置を目指す

多くの人が安全に木を植えられる場所の確保が必要であることから、関係機関（国土交通省、林野庁、栃木県、日光市）や土地所有者に活動エリアの提供を要望していく。また、今まで各々の場所で緑化活動が進められてきたが、協力し合うネットワーク型緑化事業にしていきたい。そのためには、さらに官民協働で活動することが必要であり、関係機関や土地所有者、地域住民やNPO、専門家などが連携し荒廃地の緑化事業をする「渡良瀬川源流の森再生事業推進協議会」の設置を目指していく。

●環境問題を考える拠点づくりを進める

今年4月より、公営施設である足尾環境学習センターの管理運営を任されることになった。足尾環境学習センターは足尾砂防堰堤を見渡せる銅親水公園内に位置し、足尾銅山の歴史を紹介するとともに、自然の大切さと環境問題を学べる施設である。今後は、足尾環境学習センターと、体験植樹や荒廃地を歩くフィールドワークなどを組み合わせた環境体感学習の仕組みを構築し、環境の町づくりの具現化を進めていきたい。